

Title	大工頭中井家文書(十五)
Sub Title	On the documents concerning the Nakai Family (15)
Author	中井, 信彦(Nakai, Nobuhiko) 高橋, 正彦(Takahashi, Masahiko)
Publisher	三田史学会
Publication year	1974
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.46, No.1 (1974. 6) ,p.89- 100
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	史料紹介
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19740600-0089">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19740600-0089</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

史料紹介

大工頭中井家文書（十五）

中井信彦

〔三四四〕 かち消息（折紙）

返々よくそくたのみ入申候、めてたくかしく  
一ふて申入候、そこほと御（普請）しんに御（心勞）しんろうをしハか  
りまいらせ候、又うへさま御きけんもよく御入候まゝ、  
御心やすくおほしめし候へく候、さやうに候へハわれわ  
れにかいに御させ候てくたされ候ハんとの御（意）るにて候、  
御入候つるまゝ御わすれもなくさやうになされ候しよく  
そくたのみ入まいらせ候、又わつらい申候や、くすり  
入候ハ、申候てまいらせ候、かしく

七日

六

「とうえもん殿（ウワ書）  
まいる申給へ  
かち」

〔中井家文書〕

〔三四五〕 かち消息（折紙）

以上

文のとほりみまいらせ候、さ候へハ少将様御作事の金子  
七百両ふかさわ四方介殿へたしかに相渡申候、御うけ取  
候へく候、よく御きも入候へく候、かすくまんそく申  
まいらせ候、いよ／＼御せいニ御入て給へく候、めてた  
くかしく

たつノ（元和二年カ）  
七月廿六日

中井  
やまと守殿  
まいる

より

かち

〔註〕① 少将様は於茶阿の子、忠輝のことか、忠輝は慶長十四年四月十六日に従四位下左近衛少将に叙任された。

〔三四六〕 かち消息（折紙）

一筆申候、まつゝ大御所様(家康)一たん御きけんよく御(鷹野)たかのあそはされ候まゝ御心やすくおほしめし候へく候、ひとひの比ハちと御かいきけニ御さなされ候つるか、御すきくにて御さなされ候まゝ御きつかい候ましく候、そ

こもとにも何事も御入候ハす候や御きゝまほしく思ひまらせ候、さてハ御むつかしき申事ニ候へとも、えところ四郎えもんと申候もの我身ノめをかけ申候ものにて候、それにつき大ふつにわうこまいぬいそき申候を此四郎ゑもんに御申つけ候て給候やうニたのみくまいらせ候、それにかきらす何も御申つけ候て給候へく候、たのみくまいらせ候、くハしく四郎ゑもん申へく候こゝ程にあい申候御用の事仰給候へく候、めてたくかしく

十月  
廿九日

かわこ(ウワ書)  
カ

「なかる  
山とのかみ殿  
まいる申給へ  
かち」

〔三四七〕 あちや消息（折紙）

〔註〕① 家康が川越周辺で鷹狩りをしている記述から、慶長十三年、十五年、十八年および元和元年の四年が考えられるが、元和元年には十月十日に江戸城西丸に入り、翌廿一日より戸田から川越へ赴き、三十日までこの地にあつた。本文書は恐らくは元和元年のものであろう。

返々御下候いぬとてもくるしからす候、御心やすく候へく候、めてたき事かさねく申まいらせ候、かしく此春よりの御悦ことにかひある御事といわる入まいらせ候、上さま御きけんよく御わかくとならせられ候、めてたくおほしめし候へく候、そもそも事ふゆとしハ御下候やうニと思ひまいらせ候か、おくたり候ハてもくるしからす候まゝ御心やすくおほしめし候へく候、めてたくかしく

正月五日

より

中やまと殿

あちや

申給(まいる)  
へ

〔註〕① あちや、は阿茶の局のこと、詳しく述べ三五二号文書の

雲光院の〔註〕①参照のこと

〔三四八〕 おあちや消息 (折紙)

きん中の御祝(禁)としてくろぐのとをり七色給候、いく久  
しくもと御へいちやうたい申(貢戴)まいらせ候、なをく御世  
もおたやかにおほしめし候まゝの御事ともにて御はんし  
やうの御事候、まさこの数々祝入まいらせ候、なかれの  
すゑくまてもいよ／＼つかなふ候ハんするかとめて  
たく思ひまいらせ候、なをかきねてめてかしく

〔中井〕

やまと守殿

まいる

」

〔三四九〕 一位局消息 (折紙)

返々けしからぬあつさにて候、いよく御(養)やうしやう  
候へく候、こゝもとかわる事御入候いす候、わか身も  
そくさいの事ニて候、御心やすく候へく候、なをくわ  
しくハ御ちやく名申まいらせ候へく候、めてたくか

しく

おちやくかたへの御文、みまいらせ候、ことにいきみ  
玉の御志(祝儀)うきとしてうつくしきひとへ一かさね、銀子十  
枚(諸白)もろはくたる式つさかな二色をくり給候、いつものこ  
とくきやうふかた早々いきみ玉いわる候て、そもそもの  
かれいに候とてめてたくいわるさゝめき候所へ給候て御  
心さしのほとつうしまいらせ候、よき時分まいり候とて  
さしきも一人にわかやき大くこん事ひしく(重)といたし候  
ていわる入申候、まこととめてたさいく久しうまんく  
年もあるかわらす申うけ給候ハ人といわる入まいらせ  
候、久しく御わづらい候へ共、いまほとハすきとよく御  
成候よしきゝまいらせ候、一人／＼めてたく御うれしく  
おもひまいらせ候、めてたくかしく

七月十五日

より

中井

やまと殿

まいる

申給へる

〔註〕① いきみたま、生見玉、生御靈と書く、旧暦七月八日よ

り十三日までの間に児女が生存している父母、尊長者に祝物を贈り、または饗應した儀式、行事のことという（広辞苑）

（2）もろはく、上等の酒のことをいう、なお片白（かたはく）はやゝ質のおちた酒のことをいう

（3）くこん、酒のこと

（4）一位は雲光院のことか

〔三五〇〕 ちやこ消息（折紙）<sup>①</sup>

一筆申まいらせ候、まつゝ一日申候ことくはん（晩）ハそもそも  
しさま御ふるまひにて候間、いかやう御ひま入候とも少  
御出候へく候と、ねんし入まいらせ候、そのため申候雲  
さま一日仰候まゝ御出候ハんと御うわさにて候、かし

く

十一日

ち

（結封） 中  
長吉殿  
人々

ちやこ

〔三五一〕 一位局消息（折紙）

返々まつゝことほと（家康・秀忠）両御所様御きけんよくならせら

れ候御事にて候、御上落（洛）もいつもの時分にて御入候ハ  
んとよもノとりさたにて御入候、そこともと何事なくと

りく御そくさいのよしめてたく思ひまいらせ候、御  
さくしともニ御心つくしさそくとをしはかりまいら  
せ候、わか身（刑部）きやうふもとりくそくさいの事ニて

候、もしく御ともいたし候てそのをりふし申うけ給  
候へく候、くり返しくかくみ事に候へてかし候て、  
わさく御くたし候事まんそく申候、いつかたもそこ  
ね候へてよくくたりつき申候、御心やすく候へく候、  
めてたくやかてくのほりまいらせ候、御（見參）けさんにて  
申入候へく候、めてたくかしく、きやうふもみ事にい  
てき候とてことのほかほめ申候事にて候

おちやくかたへの御文み申候、ことにかくはやくと  
御こしらへ候てわさく御くたし候事かすく御うれし  
さまんそく申ばかり候へく候、さいしきをもかのはやと  
光院付の侍女としたい。

〔註〕① 包紙に「一位様御状、中井長吉へ」とあるが、雲光院

とすると本文書おわりの「雲さま」の部分の理解がむづかしくなる。包紙によらず、次号文書を参照して「ちやこ」は雲

光院付の侍女としたい。

ニ御申つけ候て御さいし色候よし御ねんの入候事、ひと  
しほくまんそく申候、一たんくみ事さ、けつかうさ  
なかめ入候事にて候、雲光院御よろこひの事、大かたな  
らす候、雲光<sup>(院)</sup>ふんもくろたにへしゆゑんの事ニて候、こ  
の月中ニハ御のほり候まゝ御ねん比候て給へく候、こゝ  
もとに御入候内にかくまいり候て一入くめてたき御ま  
んそくかりの事ニて候、やかてく御<sup>(カ)</sup>くたせ候ハんとて  
御こしらへの御事ニて候、何かと御さくしともニ御ひま  
も御入候ましきニはやくと御こしらへ候て給候事、御  
うれしさの中く御礼申つくしかたく候、めてたくかし  
く

三月八日

右

〔<sup>(ワワ書)</sup>中る  
やまと殿  
申給へ  
一位<sup>①</sup>〕

〔註〕① 一位は雲光院としたい。

さき程ハおほしめし御より候てみ事のめつらしきちうし  
ゆ給候、御心つけの程かすくうれしく候、うちもおか  
すとりくしやうく<sup>(賞観)</sup>ハん申候、まことにまひくの御心  
つけ共、めつらしさ中々御礼申事も候へく候、あまり御  
うれしさのまゝ女御様へもあけまいらせ候御事ニて候、  
よのつね御きけんの御事ニて□□□つる、いつもくめ  
つらしきみ事なる物給候、かすく山々うれしく候、い  
かさま御しゆたい候てから御ちかしくまいり御けもし申  
候へく候、御かうせいも御出ニてそくさるまいらせ候、  
うれしさニて候へく候、御そもし御ねん比のよし御物か  
たりニてまんそく申候、いよくも早々まいらせ候、め  
てかしく

九日  
長吉殿  
御かもし  
申給へ  
雲光院<sup>①</sup>

〔註〕① 雲光院は家康の側室阿茶局（一位の局）が薙髪してか

### 〔三五二〕 雲光院消息（折紙）

く思ひまいらせ候、たゞいまちうはこもたせまいらせ  
候、かしく

より

中ゐやまと殿  
御かもしまいる  
申し給へ

一位

〔三五四〕 一位局消息（折紙）

おぢや／＼かたへの文みまいまいらせ候、まことに／＼此比  
のさむさいつかたもをなし御事となひまいらせ候、そこ  
ほととり／＼御そくさいのよしかす／＼めてたく御うれ  
しきいかさま候とみ事のちうノ内をくり給候、御心さし  
のほどたゞいまあさくさかたへ候ところへ、給候まゝ御  
心さしつうしまいらせ候とうちおかすとり／＼しやうく  
わん申候、夕はやまと殿御みまひの事ニ候、かす／＼う  
れしく思ひまいらせ候、さりなからきやうの何かとされ  
事とも申候つるまゝわか身ハかなしく思ひまいらせ候つ  
る御事ニて候、ひまのすき候へはまいり候てなくさみ申  
事ニ候、返々さい／＼よくそ／＼人給うれしく思ひまい

〔三五三〕 一位局消息（折紙）

② おけもし、御見文学、お目にかかることの意

返々、わか身も此御所さまへあかり申候、やかて／＼  
さかりまいらせ候、折ふし申候、かしく

日とひ候、よくそ／＼御文、ことに文月の御ちうゆ給  
候、折ふし此御所さまへあかり申候つるゆへ、すなわち  
御みやに、中富さまへよく申まいらせ候へハ、をの／＼  
御そは二て御どりはやしの御事ニて候、かす／＼うれし

らせ候、これよりハ□してさへ申候へく候御はつかしさ  
おもひまいらせ候やまと殿へも御やかて申候、夕ハよく  
そく御出うれしく思ひまいらせ候よしよく御心え候て  
給へく候よし候、さりながら猶きやうふされ事の申候て  
□□□□□しさかすくにて御入候事そもしの御心い  
かゝ候やとおもひ入候よしよく御つたへられ候へく候、  
おかしきくよく御入候かしく

中やまと殿  
御かもし  
まいる  
申給へ

〔三五五〕 一位局消息（折紙）

返々、やまとより、きやうふかたへ文参候か、やかて  
のほりさらニ御入候よしにて候まゝ、よく御留す候て  
御まちうけ候へく候□□まへいもしさとりまきれ御ふ  
さたにて申候、中々ことはも御入候ハす候、何にて  
も用の事猶候て申候つるよし、かすくうれしく返々  
さいく人給候事、うれしさとも御礼申つくしかたく

候事候、なを御けんにて申へく候、かしく  
さいく文給候、かすくうれしく思いまいらせ候、こ  
とにみ事の此一折いはなしをくり給候、御心さしの御ほ  
と御めつらしさなかめく入まいらせ候、わか身きやう  
ふもそくさいの事ニ候、御心やすく候へく候、かしく  
中やまと殿 一 る

中やまと殿  
御かもし  
まいる  
申給へ

〔註〕①いはなし、こけもも（越橘、また苦桃と書く）のこ

と、しゃくなげ科の植物である。

②かもし、母、または夫人、かみさまのこと、ここで  
は後者である。

③いもしさ、いそしさの意

〔三五六〕 一位局消息（折紙）

返々、申てもくそこもとニきふらいまいらせ候内、  
色々まるく御ねん比の御事ともうれしさ今とてもわす  
れやられ候へく候、こそその事のみ思ひ出、御ゆかしき  
かすく御心え候てうれしく候つるわか身わづらひも

かさる事候ハす候、御心やすく候へく候つるハ、山(大和)と  
殿らはやくとめもとへきつかい給候へく思ひまいら  
せ候よし御礼たのみ申候、めてかしく

ひとひよくそく御ふみたひをハしまし候、かすく  
御うれしく日々申出思ひまいらせ候、そこもと何事なく

そくさいの事候や、昨日ハやまと殿をこりわづらひのよ  
しきへまいらせ候、御心もとなさあんし申候、今程すき  
とほんふくの事候や、きへまほしく思ひまいらせ候、め  
てかしく

より

中る

やまと殿

御かもし

まいる

申給へ

一 る

八十四日

より

中の山と殿

一位

〔註〕① 中宮さまは東福門院和子のことか、その腹に三皇子二  
皇女の誕生を見るが、ここでいう若宮さまはのちの明正天皇  
のことを指すか、とすれば皇子は元和元年十一月十九日の誕  
生であるから本文書はこの頃のものとなる。

〔三五七〕 一位局消息（折紙）

返々かやうのめてたさいつかたをなし御事ニテをハ  
しまし候、なをめてたく御けさんニテ申うけ給候へく  
候、めてかしく

おちやくかたへの文みまいらせ候、まことにく中宮①

〔三五八〕 ちやく消息（折紙）（檀紙）

かうしゆんへ文給候、ことにたもし一折下され候とて  
御悦われくへ御礼申せよし候、御□りも御給候、う  
れしさ申せとて御入候、こうしそくさいニコへありの  
き申候、返々文給御うれしさかすく申され候、かし

文給うれしく思ひまいらせ候、一位さまへ御ちうの内心  
へ候てまいらせられ候、よのつね御悦御きけんよくわれ  
く方心へ候て御礼申せとて候、一いさまへの御ちそう  
ふりかんし入まいらせ候、かしく

十二日

長吉殿  
御かたさま

御返事  
申給へ

ちやく

〔註〕①たもし、とよむと、蛸のこと、また煙草のことをい  
う。ここでは前者を指すか。

〔三五九〕 ちやく消息（折紙）

雲さまより文まいらせられ候、御と受け候て給へく候  
誠にさいく御心入かんしまいらせ候、あつさくも  
たへまいらせ候、そこもとなとすべしく御入候ハんと  
御し計まいらせ候、返々文うれしくながめ入まいらせ  
候、めてかしく

よくそく文御めらしさなかめ入まいらせ候、雲さまへ  
見事のふり二二まいらせられ候、大かたならず御きけん  
よくいか程もく心へて御礼申せとて御申候、御かうせ  
いさま御すしけあんし入まいらせ候、かしく

長吉殿  
御かもしさま

人々  
申給へ

ちやく

〔三六〇〕 かうさうす消息（折紙）<sup>①</sup>

返々三十人のてかた給へく候、たのみ入まいらせ候

以上

北政所さま御寺の御用にて候まゝ御大く此かきたてのこ  
とく合参十壱人(手形)てかた給候へく候、たのみ入まいらせ候  
かしく

後八月十三日

ふしみ

より

「なかい」  
(ハツワ書)

藤右衛門殿  
まいる かうさうす

まいる

」

〔註〕① かうさうす、孝蔵主のことであろう、孝蔵主は川副勝重の女で、はじめ秀吉に仕えたが、のち家康に招かれ江戸へ下つて將軍秀忠に仕えた。本文書は後八月とあることから慶長九年のものである。(後一月ともみえるが、そうすると天正十九年まで遡るので従い難い)北政所さま御寺の御用とみえることから江戸下向以前のものである。なお次号文書は差出書に「かうすう」とみえるが、本文書と同じく孝蔵主のものであろう。(孝蔵主については中村孝也氏、家康の族葉、三〇三頁参照)

下され候、やかたへいつそやもまいり候へとも大仏に御入て御めてかゝり候ハス候、はりまよりの御つかいゆの山へまいり候ハんと申され候へともとゝめまいらせ候、やかてほうりう寺へ御□□と申存候、御ふみまいらせ候へと申され候まゝ一筆申候、かしく

廿七日

御やしき

中井 大和守殿 まいる  
申給へ かうすう  
まいる

〔三六一〕 かうそうす書状 (折紙)

近々此表より御せん様そもそもまへ御たのみなされ候つるとおほせられ候てさいゝおせつきなされ候、以上

〔三六二〕 春日局書状 (折紙)

昨日ハいんしんと候てひらうと二卷、ことにやまとひさうして(秘藏)たれ候よし御申候て後京極のしきしのかけもの一ふく給候、ひとしほなかめ入なみたをこほしまいらせ候、そもそももちとくけんさんにて御物語も申候へてと思ひまいらせ候へとも、さま御かへ候てハつかしきと御申候よしぬいふたりのものかたりにて候まゝせひとつ申候ハす候、もし御心中くハしくまいまいらせ候てきと申人ニ御申付候やうに申候へとさいゝおほせられて

とくなる御事とかんしまいらせ候、やまと御(袋)ふくろより

も人給候ハんよし御申候へともぬいふたりとめ申候よし

申され候事候、さそへと心の程す(推量)いりやう申候て御ら

いさ申事候よし御けもしに入候(下)てくたりまいらせ候ハ

ん事候へく候、かすく残おほく思ひまいまいらせ候、かし

く

〔ウワ書〕

カ

正うん殿

かすか

まいり

「

〔三六三〕 春日局書状（折紙）

なをくわざとこれよりも銀子十枚まいらせ候、いく  
久しくとのしるしまでにて候へく候、なをめてたさま

て申へく候、かしく

〔公方様〕

一筆申まいらせ候、くはうさま若君さま御きけんよく御  
さなされ候、いよくうちつゝき若君さま御(成)せいしんな

され候御事かやうのめてたさおろかの筆(述)二ものへかたく

思ひまいらせ候、一日者はやくとしうき給候、めてた

くいわい入まいらせ候、かしく  
「 中い  
　　御正うん　まいり  
　　申し給へ  
　　かすか  
　　」

よくそや文給うれしくおもいまいらせ候、こなたよりも  
ちと文にても申たく候へ共、此程ハかすかへまいり、そ  
れよりほうりう寺(法隆)、たへまあたりへまいりやうく二三  
日さきにかへりまいらせ候ゆへ、文にても申さす候、心  
より外に思いまいらせ候、こなたへもよひまいまいらせ候て  
ちとけさん申たく、わが身も御ゆかしく候へ共、ひとゐ  
も申候ことく江戸にて申候ハいかにもひそかにしのひ、  
京にてしれたる人にもあい候へてまいり候と申候に、さ  
やうにあなたこなたと申候へハまへり候ての申やうなく  
候間、御出候やうにとも申さす候、御のこりおほさかす  
くにて候、まつゝ見事のきくノ花□ 給候、庭  
前のかとなかめ入まいらせ候、いかさまこなたよりくわ

しく可申候、ひま入候事にておもふにゆへきうく申  
候、かしく

へく候、めてたくかしく

「正うん殿

〔ウワ書〕

御返事

そしん

まいる

」

正うんとの  
まいる

申給へ

かすか

〔ウワ書〕

」

〔註〕①差出者の「そしん」および宛書の「正うん」について  
本文書包紙ウワ書に次の通り記されている。

「そしん殿と申ハ春日局と御同道ニ而御登り候まち長門殿後  
室也、正雲と申ハ二代目大和守妻也」

〔三六五〕 春日局消息（折紙）

ことしひまた何かとこれより文にても不申候、いよ  
くたつしやの御事にて候や、きゝまほしく銀子三枚お  
もいまいらせ候、こゝほどくはうさまひめ君さまへも御  
きけんよく御さなされ候まゝ御心やすく候へく候、わか  
身もそくさいにてさぶらいまいらせ候、御心やすく候へ  
く候、ことしひめてたき御いそかわしさゆへ、おそらく人  
おのほせまいらせ候御事候、わざとまでにまいらせ候、  
かれいのしるしまでにて候へく候、なをめてたさまで申